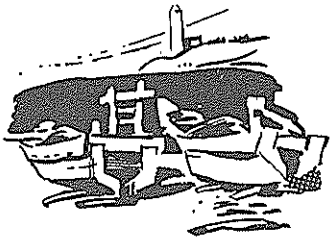
同和教育シリーズ ⑥



部落解放への道

部落についての俗説 (一)

部落は、いつ頃、誰によって、何のためにつくりだされたかを明らかにしなければなりませんが、その前に、部落についての科学的でない俗説が広く、根深く残っておりますので、これらの誤った考え方のいくつかをとりあげ、その誤りを指摘しておきたいと思います。

(一)部落の人たちは、日本人とは人種がちがった人たちである。

特にこの中でも、朝鮮人の子孫(豊臣秀吉が朝鮮征伐した時の捕虜の子孫だとか)であるとする説

現在の憲法では、すべての人間は法のもとに平等であり、人種が異っていても差別される理由とはなりません。だから朝鮮や東南アジヤ、そのほか、どこの国の人でも差別されてもしかたがないという考え方はあり得ないのです。

このことは別にしても、日本列島に人類が住みだしたのは、少くとも一万一千年以前は確実といわれています。

この間にシベリア方面から北方系の民族や漢民族、蒙古、東北地区(旧満州)朝鮮などの大陸系の民族、さらには南方系の海洋民族などが長い年月に少しずつ日本列島にやってきて、これらの民族が互いにまじりあい、雑種混血の民族として現在の日本民族ができたことは現在の学問上の定説となっています。

わが国は、古代から朝鮮や中国とはたえず交通し、産業や政治や宗教や、その他あらゆる文化をとり入れて繁栄してきました。これらを伝えた外国人(のち大部分は帰化した)は大切にとりあつかわれ、重要な官職や土地を与えられており、日本の皇室や上流階層の人々の血筋の中にもこれらの人々の血がたくさん入っております。

したがって当時の日本では、この人々を差別するどころか、それらの人々にあやかろうとして、自分の姓や名前を変えたりした人もたくさんあるくらいです。

日本の天皇家の血筋にも、この人たちの血はたくさん混じっています。例えば桓武天皇の生母「高野新笠」は百済の帰化人であり、嵯峨、仁明天皇の妃もそれぞれ帰化人の血を引いていると伝えられています。

平安時代のはじめにだされた新撰姓氏録(当時の畿内各地の名家の家系を分類した本)のなかで、千百八十三氏の名家といわれている家の成りたちを調べて書かれてありますが、その内わけは皇別(天皇や皇族のわかれ)三百三十五氏神別(天神地祇のすえ)四百四氏

蕃別(帰化人の子孫)三百二十七氏となっており約三分の一近くが帰化人の子孫で占められていることからも、この人たちが当時の社会でどのように取りあつかわれていたかがわかることと思います。

また、応神天皇の十四年に弓月君は百二十七県の民をひきいて百済から帰化して大陸工芸(はた織の技術)を伝え秦氏の姓を賜ったことが日本書記にのせられており

この人たちの子孫は全国に分布し、稲荷神社はその氏神と伝えられています。土佐の長宗我部氏も秦氏の出であり、谷秦山や谷干城もそうだといわれております。

奈良朝以降は養老雑令によって帰化人や亡命者は東国に移され開拓に従事しましたが、これらの地方には部落はあまり多くありません。また、エゾやクマソなども部落の人の祖先だという説をとなえる人もありますが、東北地方や南九州には未開放部落は、きわめて少ないことによってもこの意見は誤りであることが実証できると思います。中国地方や北九州と朝鮮とは、わずか二百キロにも足りない海をへだてているだけですので古代からひんぱんに交通や通商が行なわれ、文化や人の交流も多かったことでしょう。しかも、彼の国は当時の日本にくらべて、あらゆる面で先進国であったし、皮膚の色や体位骨格もきわめて似かよっていますので、それほど無理なく同化したものだと思われます。

私たちすべての日本人の血筋の中には朝鮮や中国系の血筋も入っており、部落の人たちだけが朝鮮人の子孫だという俗説は全く誤りであり、科学的な根拠のないことです。

朝鮮の人たちをべっ視する考え方が現在でも我々日本人の心の奥底に残っていますが、これは明治初年から我が国が軍国主義化し、朝鮮への植民地政策の中でつくられたものですから反省しなければなりません。

8月22日・東京の新橋――品川間に初めて電車が運行を開始した。(明36)